

言語本質観——言語次元説の提唱

目次

- 一、はじめに
- 二、言語の成立場所と言語の機能
- 三、言語次元説の原理
- 四、これまでの学説と言語次元説
- 五、万葉集の言語次元
- 六、万葉集の「言」の分析
- 七、万葉集の言語生活の語彙
- 八、結び

一、はじめに

私が言語次元説を構築し提唱する動機は、遠く昭和三十三年の卒業論文の時に遡る。論題は「言語と行動」(百五十五枚)とし、第一部「意味論の紹介と二、三の問題点」、第二部「言語と行動による言語観の主体分類による考察」とした。

福田 眞久

その第一部は当時盛んに紹介された意味論の研究から、S-Iハヤカワ教授(一九〇六・アメリカ)の『思考と行動における言語』(昭和二十六年)を取り上げ、論じたものである。因みに、第二部は言語主体に付いて研究し、集団的主体について新説を提唱したものである。(これについては後日別に論ずる予定である。)

その後私は修士課程に進み、言語の本質を研究する言語本質観(言語観、言語理論、言語哲学)を研究テーマとして専攻して、二年のあいだ言語の成立場所の研究を続け、苦心惨憺しながら言語次元説の体系を完成して、昭和三十五年に修士論文としてまとめ提出した。

言語の本質を研究することは本来哲学者の専門領域であり、形而上の問題であるとされている。「具体的な言語事実から離れられない言語学の側では、これを直接正面から取り上げて出発しなかった」(『国語学研究辞典』六頁)と言うが、私は国語学者の立場からこれに真正面から取り組んだ。

意味論においても、一般の言語の定義に於ても、「言語は思想・感

情・意志の伝達において成立する」と定義されているが、私はこの定義に大きな疑問を感じるところを出発点とした。戦後は特にマスコミの発達にともなう、コミュニケーション論が盛んとなり、コミュニケーションを言わない者は人にあらずの感さえあった。私はこれに対して大きな疑問を感じていた。

その後も私は一貫して言語本質観の研究を続け、新しく提唱した言語次元説を裏付ける為の実証作業を続けて来た。その為に万葉集の和歌を分析したり、古今和歌集を分析したりして、言語次元説の正しさを検証して来た。

二、言語の成立場所と言語の機能

言語次元説は、言語学・国語学一般に於ける言語の定義として「言語は思想・感情・意志の伝達において成立する」としているが、この定義に疑問を感じるところから出発する。

例えば、山田孝雄氏はホイットニー氏の所説を引用し「言語は吾人の表彰せむと欲する思想及び感情の符号として種々に結合し若くは配列せらるる音声の変化なり。」(『日本文法論』一頁)と言い、或はまた「言語は人が思想を発表し、他に伝ふる方法として、その思想を音声にてあらはしたるものなり。」(『日本文法学概論』一頁)とする⁽³⁾。

橋本進吉氏は「思想(及び感情)を他人に伝へる為に用ゐられるものである。」(『国語学研究法』一七四頁)、「ことばは人が思想感情意志を他人に伝へる為のものである。」(『国文法体系論』七頁)として⁽⁴⁾

いる。

時枝誠記氏は「(一)言語は、思想の表現であり、また、理解である。思想の表現過程及び理解過程そのものが、言語である。(二)言語が、思想の表現、理解であると云っても、すべての思想の表現理解が、言語であるのではない。絵画や音楽も、思想の表現理解である。

言語は、音声(発音行為)或は文字(記載行為)を媒介とする表現過程である。同時に、音声(聴取行為)或は文字(読字行為)を媒介とする理解過程である。」(『国語学原論統編』四頁)とする⁽⁵⁾。

築島裕氏は「言語は人間と人間との間において、思想・感情を伝達する手段であり、音声又は文字を媒介として成立する。従って言語が成立する為には、言語を表出する主体(話手又は書手)と、言語を受容する主体(聞手又は読手)を中心とする場面と、伝達される内容(表現対象)との三者の存在が必要とされる。」(『国語学』二頁)とする⁽⁶⁾。

森下喜一氏は「言語は、思想・感情・意思等を伝達する主な手段として用いるものである。」(『国語学通論』一頁)とする⁽⁷⁾。

三木幸信・中西宇一氏は「言語は、まず何よりも話し聞き、読み書きする具体的な「言語活動」として営まれる。話手は何らかの意味内容を聞手に伝えようとして表現し、聞手は話手の伝えようとする意味内容を理解しようとする。そこに言語が成立する。」(『国語学』一頁)とする⁽⁸⁾。

このように、現在までの言語本質観では、伝達説が唯一絶対である

ことがわかる。

しかし、現実の人間社会における言語の機能や、人間の言語活動を観察する時に、伝達ではない言語、即ち独白の言語や伝承の言語というものが存在するのである。私はこれらの言語の本質や機能や性質などを、その成立場所を研究しながら考察し、その結果、自己場には独白言語が成立し、局所場には伝達言語が成立し、統一場には伝承言語が成立することが判った。それを言語次元説と名付け、新しい提唱をすることとなった。

まず、言語の成立場所とは言語が成立し、展開する背景となる場所をいう。この場所はそこに成立する言語の背景として言語を展開させる理由となり、影響を与えるものである。外形として同じ言語であっても、その意味や内容が異なるのはこの成立場所やその構成要素や状況が異なるからである。このように、場所は言語成立の根本であり、もっとも重要な要素である。

1、自己場―独白の場

人間社会の実際の言語行動を観察してみると、一般に「独白」と言われている言語の現象は、伝達のように相手（理解主体）の存在を特に必要とはしていない。これは明らかに伝達とは異なるもので、言語の独白機能による活動と言ってもよい。

この言語行動から、このような機能を有する言語を独白言語と名付けたいと思う。

このように、言語の機能の一つ目として、独白が挙げられる。この機能により独白行動がおこなわれる。こうして成立する言語を独白言語と名付ける。

この独白言語の成立場所を考えてみると、主体の個人的心理的な内的空間を背景としていることが分かる。これは主体對自己で構成される心理的な場で、主体が自己と対話し、自問自答が行なわれる場所である。これを「自己場」と名付ける。

依って、自己場とは主体が自己と交錯して、自問自答の独白をする時に形成される場所である。

この自己場に成立する言語の内的要素・要因としては、主体の心理学的なもの、即ち主体の自己の心理・性格・人格・思考（個人主体の場合）や、地位・仕事・関係等の諸要素（集団的主体の場合）が考えられる。これらの場所の有する諸要素がそこに成立する言語に影響を及ぼす。これらを「場力」と呼ぶことが出来る。「場」は単なる背景を意味し、静止しているものではなく、能動的に働き掛け、作用する有機的なものである。だから、独白の言語や日記の言語にはそれらの諸要素が影響を与えるので、逆に具体的言語から作者の心理・性格・人格・思考を分析し推定していくことが出来る。この方法は作家論や作品論などにおいて有効である。

言語の伝達においては、相手が存在し、自分と相手との間で構成される局所場が、そこに成立する言語に影響するのとは、その構造・性質などが本質的に異なる。

実際の人間社会の言語に付いて考察してみると、独白という言語行動による言語存在は口頭の活動としては子供達の独白から、成人の眩きや老いの繰り言、書記の活動としては日記までさまざまあることが分かる。これらは、他者の存在からの影響や制約を受けることはなく、その主体の自然に発する言語（声）であって、その人の真情や本音を表現していることが多く、そこに明確な他者に対しての目的や意識はない。

このような独白は、演劇や能などではしばしば自己の心理や心境を語るといった形式に応用されている。これは観客に理解させる為で純粹な独白ではないという見解もあるかも知れない。しかし、これはやはり独白言語の表現形態の一つである。

さらに、文芸の世界でみると大部分の詩歌（相聞を除く）や、随想・随筆などがこの独白言語に所属するものであることがわかる。文芸の世界では「独白文芸」という用語があるほどであり、伝達や伝承とは区別されている。

個人主体だけではなく、集団的主体の場合を考えてみると、自己場を構成する同一集団内での構成員の地位、身分、権力などの諸要素が、強く働き掛け、力学的な展開が見られる。

2、局所場―伝達の場合

言語の機能の二つ目として伝達が挙げられる。この機能により伝達行動が行なわれる。こうして成立する言語を伝達言語と名付ける。

この伝達言語の成立場所は表現主体（遂行主体）と理解主体（理解主体）とで構成される。この表現主体と理解主体とは現実社会の同一の空間時間に属しており、横の水平的平面的関係にある。言い方を変えれば、言語主体と言語主体とが社会的に構成する場所がこの伝達の行なわれる場所である。このような空間的・社会的・水平的・平面的な場所を「局所場」と名付ける。

これを局所場と呼ぶのは、私達の生きている実際の共同社会では、場所は時間的・歴史的・総合的・立体的に縦横の総合された統一であるべきなのに、横の社会的空間的平面的な関係において表現主体と理解主体とを取り上げるといって、部分的局所的な場であるという意味からである。次項で説くように、言語主体と言語主体とで歴史的に構成される場所は「統一場」と呼ばれる。

伝達言語はコミュニケーション言語とも呼ばれ、表現主体から理解主体へ伝達され、相手の理解主体の存在がそこに成立する言語に影響を与える。

依って、局所場は表現主体と理解主体とで構成され両主体間で、思想・感情・意志が伝達される場所をいう。

この伝達という事実は非常に重要である。多くのヨーロッパ言語学およびその影響を受けた日本の小林英夫氏の言語学や、ソシュール批判をした時枝誠記氏の国語学上の言語過程説において、言語の社会性が重視されている。また、現代の社会学の著しい進歩のもたらしたコミュニケーション科学が社会面を重要視する思想に基づいていること

からも解る。しかしながら、先程触れたように、言語の歴史的な面を取り上げる為に、言語学に歴史的な視点を導入することも大切である。

3、統一場―伝承の場

言語の機能の三つ目として、伝承があげられる。この機能により言語の伝承行動が行なわれる。こうして成立する言語を伝承言語と名付ける。

伝承言語の成立場所は、伝承の伝承主体と継承主体とで構成され、伝承言語は歴史的な縦の時間的な構造の場所を背景として成立する。

これを具体的にいえば、基本的には神話や伝説のように、歴史事実や伝承内容を継承者たる老婆などの語部が仲介者となって子や孫達に語る。そこには語部の個人の意思や感情は抑制されて余り入りこまないという特徴を有する。これは伝達言語が個人の意思・感情を表現し、社会的空間的であるのとはおおいにその有り様を異にしている。その理由は、これは言語の機能の相違、特に最大の理由はそれぞれの言語の成立場所が異なっている為である。

このように、伝承言語が行なわれる場所は、伝承主体と継承主体とによって構成され、伝承されるが、この時間的・歴史的・総合的・立体的な場所を「統一場」と名付ける。

古事記の稗田阿礼をはじめ、中世説話の語部たち、或は平家物語の平曲を語る琵琶法師たちもこの語部の役割を果たしている。この語部は現代にも見られ、広島・長崎の原爆悲劇の語部という言葉が使用さ

れている。伝承言語が遙か過去の歴史を語るだけではなく、比較的に近い現代を語る場合にも使用されている例として、おおいに注目してよいし、その役割を正しく理解して、言語学的に位置付ける必要がある。また、現代でも母親がお伽話を子供に読んで聞かせる言語行動や、テレビが母親の語部役の代用を務めていることも注目すべき、現代の特徴である。

文芸の世界では、伝承文芸という用語が存在しているが、今述べたように伝承は現実に言語生活においても厳然と存在している。この文芸学上の成果を積極的に言語学に導入し、言語の立体的な姿を正しく捉えたいと思う。

この他、特に文学の世界では伝統を継承すること、或は、伝統を継承総合してさらに新しい伝統を樹立することを志す。この言語による伝統の継承、或は伝統の樹立ということは明らかに言語の一機能であり一作用である。この機能は言語による思想・感情・意志の伝達とは自から相違する。この相違の事実を認識し、二者を厳然と区別する必要がある。この言語の機能の相違は言語の質の相違をきたしている。

この相違を無視して、これをも伝達の原理で説明しようとするとするれば、それは無謀という他はない。

同じ統一場において成立する言語でも、先に述べた伝承の言語と、今述べた伝統の言語とは、基本的な構造などにおいては類似性があるが、その言語の質はおおいに相違する。伝承言語は集団的であり、没個性的であるが、伝統言語は甚だ個性的である。

さて、ここで局所場・統一場という用語について説明しておく。

この用語は、理論物理学の分野で素粒子の構造や運動を説明する為に使用される概念である。今この概念を私の場所の研究の為に参考として使用したものである。

湯川秀樹氏に『存在の理法』『極微の世界』などの著書がある。湯川氏は「例へば古典物理学の範囲内では、ニュートンの運動の法則とか、マックスウェルの電磁場の法則の如きものであります。これ等の法則は局所的であると同時に因果的であるといへます。」（『存在の理法』二十四頁）と言っている。また、氏の業績は「素粒子論においては、現在もっとも高度の理論である場の量子論が基礎としていて時間空間概念がきわめて素朴なものにすぎない点を改良することによって素粒子の統一理論を達成することを試み、その立場から、いままで考えられている場が時間空間の一点だけの関数であることを改良した非局所場の理論、時間空間の領域は無限に分割できるものではなく、分割不能な基本領域があるとする素領域の理論などを提唱した。」（『日本大百科全書』）と^⑩言われている。

朝永振一郎氏の業績は、「第二次世界大戦中、当時までの場の量子論が、内容的には相対性理論の要求を満たしていながら、その形式がその要求を明確には満たしていない欠陥を改良するために、空間の各点ごとに異なる時間を考える超多時間形式を考え、これによって、場の量子論は、内容・形式ともに相対性理論の要求を満たしていることがはっきりするようになった。」（『日本大百科全書』）と^⑪言われている。

坂田昌一氏の業績は、「電磁量子力学や朝永らによる「くりこみ理論」に影響を与えた「C中間子（凝集中間子）論」の提唱（一九四六）をはじめとして、「くりこみ理論」の適用限界についての研究に取り組んだ。五五年（昭和三〇）にこうした一連の研究成果から素粒子に対する複合（坂田）模型を提案し、素粒子論の新たな展開を生み出した。また、この複合模型の誕生には、物質の無限の階層性という自然観が重要な役割を果たした。」（『日本大百科全書』）と^⑫言われている。

統一場の理論については、「物理学では「場」はある力の及ぶ範囲という意味の述語として使われており、その力が何であるかによって「電場」、「磁場」、「重力場」（そして、これらの個々の場合を統合する理論として「統一場の理論」）などということが言われる。」（『意味論』二八〇頁）と^⑬説明されている。

私は高校生の時代からその方面に関心を持っていたので、それが私の言語の成立場所の研究に何らかの形で役立ったと思う。

三、言語次元説の原理

上述のように、言語の成立場所には三つの異なる場所があることが分かった。その三つの場所にそれぞれ異なる言語が成立することも判明した。

即ち、自己場には独白言語が成立し、局所場には伝達言語が成立し、統一場には伝承言語が成立する。

この三種の言語はそれぞれ異なった目的・構造・体系・価値・世界とを持っており、異なった次元の言語である。このように、言語を多次元的に捉えようとするのが言語次元説の原理である。

私は以上のように、三つの異なる種類の言語を総合的に捉える原理を言語次元説と名付ける。

一般の議論として、私のいう伝達言語を空間的伝達、伝承言語を時間的伝達と呼んで、あくまでも伝達論の原理のみを用いて、その範囲内で処理しようという考え方ががあるが、私はそれには反対である。それぞれの言語の次元の相違として、その独立した世界・価値を認めるべきであると思う。ここに言語次元説を主張する積極的理由が存する。

また、時枝誠記氏の言語学説は言語過程説と称するが、これも言語の伝達面のみを捉えたもので、言語の全体を捉えたものではないと思う。

言語を定義して、「言語は思想・感情・意志の伝達である。」とすることは、私に言わせれば、言語の独白・伝達・伝承と三相ある内の三分の一の実態しか捉えていないことになると言わざるを得ない。私は、「言語は人間の独白・伝達・伝承の心理的・社会的・歴史的な活動において成立する」と定義する。

今日迄の日本を代表する国語学説である、山田孝雄氏の統覚心理学に基づいた機能的言語観、橋本進吉氏の要素連合心理学に基づいた言語实在観、時枝誠記氏の概念過程重視の心理学に基づいた言語過程説などには、先に触れた通り言語の伝達思想が厳然と存在することがわ

かる。

また、一方では映画・新聞・ラジオ・テレビから、最近のインターネットの発達という科学の進歩のもたらしたマスコミの異常な発達から、社会学或いは伝達論（コミュニケーション論）が盛んに取り上げられている。しかし、言語の機能・行動には、伝達だけではなく、他に心理学的な面を多分に持った独白や、歴史的意義と文芸的意義を多分に持った伝承とが存在することを忘れてはならない。

従って、大方の国語学概論のテキストの巻頭にある定義は修正されなければならない。言語の三つの価値・世界の存在をそれぞれ平等に認め、尊重しなければならない。

言語次元説はこのようにマスコミュニケーション偏重に見える風潮と、それに引きずられているように見える言語学・国語学に対する警告の意味も持つものである。

私が編纂に加わった概論書『日本語学』¹²⁾では次のように説明している。参考の為に掲げることにした。

言語は人類の歴史と社会の文化の結晶である。その言語は、人間の思考・認識・判断をなさせ、独言では自己慰安や心とませる機能を有し、社会的には共同生活での協調に立って意志などの伝達をなし、歴史的には神話・伝説や生産方法などを子孫や後世に伝承する機能も有する。これらの言語を思考言語・独白言語・伝達言語・伝承言語と名づけ、其々の間に独自の世界・価値を認める。

従来の一般の言語の定義は、「言語は思想・感情・意志を伝達する」とされてきた。しかし、言語の本質を深く観察するとき、言語には伝達を前提としない独自の言語がある。例えば、幼児の遊戯における独言、大人のもらす独言、老人の独言などがある。また、短歌・俳句・詩などの詩歌作品の多くは贈答伝達を目的としないもので、自己との対話（自問自答）によって成立する点を考慮すれば、獨白性の濃い作品ということになる。

また、神話・伝説を語部や古老が語り継ぐ言語活動は、社会的な伝達とは区別されなければならない。これを伝承言語と言ひ、例えば神話・伝説の語部・古老の伝承、仏教説話の師僧よりの継承、氏族・家庭での武勲伝承などがある。これは歴史的・時間的な言語の活動で、この継承性・伝承性が一般の社会的な伝達とは相違する。

このように、従来一般の言語の定義である伝達論万能を排して、多元的な観方に立つ言語観を提唱し、これを言語次元説と称する。言語次元説では獨白・伝達・伝承の三言語を認め、各言語に独自の世界、独自の価値を認める。それとともに、各言語は独自の機能を有するから、言語は獨白の機能・伝達の機能・伝承の機能を有すると言える。獨白言語と伝承言語とは、日常生活の現実と文学において重要な役割を果たして、伝達の文学（相聞歌など）とは異なる独自の世界を有していることが解る。

四、これまでの学説と言語次元説

これまでの場所についての学説と言語についての観方を見てみよう。まず、自己場、或は獨白言語については、私は日本にソシュールの紹介を行い、現代ヨーロッパの言語学を広めた小林英夫氏の独創的な業績、美学的文體論を挙げたい。

小林英夫氏は『言語学方法論考』（昭和十年）『言語学通論』（昭和二十二年）などのほか、文體論の關係の著書として、『文體論の建設』（昭和十八年）『文體論の理論と実践』（昭和二十三年）を著している。後者に収められている『文體論の美学的基礎づけ』に付いて検討してみよう。

小林氏はリヴィウ・ルスの『芸術創作論』を参考にし、「芸術創作は心理学的問題ではなく、美学的問題である。……芸術家の苦悩にみてる創作過程を一步一步跡付けることにより、我々は芸術品の本質と価値とを一そうよく理解することができるであろう。このやうな行きかたをする美学を、我々は旧来の静態美学に对照して、動態美学と名づけるのである。」（同書二十八—二十九頁）と言ひ、意味・判断・思想・生活——人格として、「人格は何にもまして生活と最もかたい結合をなす。故に人は文章のなかに最もよく自己」を反映せしめるのである。」（同書一三四頁）とする。これらの方法は私の言う自己場に成立する言語を対象としているから、獨白的に言語を見ていることが判る。

この書の実践の部分に当たる「シガナオヤ論」「オカモトカノコ論」

「みだれ髪」の構造」をみると、伝達の観念や伝承の観念や伝統の観念はほとんど問題になっていない。そのような意味から、小林氏の文
体論の研究は独白の面を重要視していると言っている。

次に、波多野完治氏は『文章心理学の問題』（昭和十六年）、『文章心理学』（昭和二十四年）、『現代文章心理学』（昭和二十五年）、『創作心理学』（昭和四十一年）、『文章心理学の理論』（昭和四十一年）などの著書がある。

波多野氏は「我々は文章論の課題を「文章の表現価値の心理学的解明」として規定したのである。」（『文章心理学』三十九頁）と述べ、文章心理学は表現された文章の美文・悪文などの価値判断を心理学的な根拠から説明を与える事と理解していると思われる。更に氏は、在来の修辞心理学・連想心理学・エコノミズムを批判し、「修辞心理学を正しく展開するためには、言語の社会的機能に関してはデュルケム派の社会学に影響された言語心理学及びアメリカのシカゴ学派に属する社会心理学の言語理論を採り、言語の表現機能に関してはゲシュタルトの構想を具体的に展開して行くより外に道はない様に思う。」（同書六十五頁）と述べている。その実践的段階に属する「第二編文章の性格学」の谷崎潤一郎・志賀直哉の研究について見るに、やはり私の言う自己場を対象としているから、独白的に言語を取り扱っていると思う。局所場や統一場への関心は見られない。

佐久間鼎氏は『現代日本語の表現と語法』（昭和十一年）、『日本語の言語理論的研究』（昭和十八年）、『現代日本語法の研究』（昭和二十

七年）、『日本語の言語理論』（昭和三十四年）、『日本の表現の言語科学』（昭和四十二年）などの、現代語を中心とした研究に優れた業績がある。

次に、佐久間氏の言語観の特徴は行動主義的心理主義の傾向が濃く、言語活動を主体の活動・行動によって起きる心理学的空間から説明しようとして、場の理論を導入している点にある。佐久間氏は、発言の場・話題の場・課題の場の三つの場を提唱された。私はこの点を高く評価する。佐久間氏は「行動としての発言という事象の条件発生が場の制約にもとづいて成り立つことについては、このような〈場の理論〉field theory が根拠となります。こうして、著者の〈発言の場〉は、レヴィーンの生活空間における行動の見解において理解されるべきですし、ミオの所説の構文について説かれる〈場〉も、ほぼ同様の事情によって着想されているわけです。レヴィーンの場合、現実性に対する非現実性の対応の場の相互関係は、著者にあつての言語機能について説く〈発言の場〉対〈話題の場〉の關係に相対すると見られます。いずれにしても、行動・事象の条件発生に關して成因として参与するゆえんのものとして〈場〉というものが理論的に要請される次第で、これによって科学的進展が可能にされる次第です。さらに〈課題の場〉がとくに知的活動に關してその發生成立を条件づけ、法則性を導き出すことに留意すべきです。これは一方論理的思考の方向づけを十全に説明するゆえんとなるもので、生産的思考、さらにいわゆる神祕的体験の味解において、大きな役割を引きうけるはずのものです。」

『日本語の言語理論』三十四頁)のように、行動としての発言と考え、行動主義的な態度をとらせたことが分かる。動力学過程、即ち動くものを動くものとして把握しようとする所に、行動主義による言語観が導き出され、打ち立てられた。

ここで、佐久間氏の場の理論について検討を加えてみたい。

まず、佐久間氏の場合は動的過程をその動くままの姿において理解把握しなければならぬという、ゲシュタルト心理学の流れを汲むものである。そして、レヴィーンの生活空間における行動を重視する思想に拠り所を見出し、行動に根拠を求めた。そして、この行動中心主義的な思考、方法によって、動的過程の理解把握を示したわけである。

そのような事情から、三つの場についての思惟は、いずれも心理的活動にその本性を認められる。ここに佐久間氏の論の特色を一言にして言えば、行動主義的心理主義の立場に立つものであると言える。即ち、三場は何れも話手と聞手との間に、行動によって心理的に開けてくる広がりとしての場である。

動的過程を正しく理解把握する為に、行動主義の立場をとり、そこに根拠を求めたことは、確かに人間の活動、行動の動的過程をとらえる事が出来たように見受けられる。しかし、活動・行動の背景・動機・内容などについては具体的には何の指示もない。いま我々は視点を据えて世界宇宙を凝視するとき、佐久間氏の行動主義的心理主義に基づく理解把握はやはり動的であると言っても、統一的全体的ではなく、一部分的・局所的であることに気付く。氏の行動というのは、話手と

相手による言語活動を指し、その活動において言語の場を捉えようとしている。これまでの静的な場の把握に比して、行動主義的な場の把握は確かに一歩進んでいるし、言語をそれ自体からのみではなく、言語活動、言語行動において捉える事はなるほど、動的と言い得るであろう。

この佐久間氏の行動主義的心理主義による場の理論は、私の立場から言うならば、まだなお局所的範囲を脱し得ず、局所的思考を背景としていると言うことが出来る。何故かと言えば、動的な把握が必ずずぐに統一的全体的な把握であるとは言いがたい。実際に、行動は話手と相手との間に起きる心理的活動を指しているのだから、全体的であるよりも一部分的であり、局所的である。全体的な理解把握の為に、時間的な縦の永い時間の歴史・伝統を考慮に入れなければならない。ところが、佐久間氏の場の理論にはこのような時間的な縦の線から全体の中に位置づけて現在を見えるという態度に欠けている。そのような傾向から出てきたのが、発言の場・話題の場・課題の場である。

この考え方は時枝誠記氏の場面の思想と比べてみると、類似している点も、また相違している面もある。時枝氏の場面は話手と聞手を含んだ態度・気分・感情とによって考えられたものである。佐久間氏の場は、話手と聞手の共通の心理的な空間をいうのだから、局所的であるという点では両者同じである。

それでは、統一場からどう説明を与えたらよいであろうか。統一場とは現在空間を時間的空間として認めるのであり、時間の流れに沿っ

て把握するものである。第三次元的空間を第四次元的空間として把握する態度である。空間を空間的にではなく、空間を時間的に見、現在を過去と連続する現在と見るのである。現在空間をかくの如く考えることによって、場を局所的ではなく、全体的に見る事になる。実際に、話手と聞手とによって構成される場は、極く狭い範囲に限られた局所的な理解であり、現在の主体と過去の社会・歴史・伝統の事実によって構成されるとする時間的な見方は、全体的統一的である。過去の全体が現在に累積され、現在が過去的事実を受け継いで、全体的統一的である。

これが場の理論の、一つを全体との関連において見なければならぬということ、新しい提案の、具体的な解答である。

現在空間そのものは局所的であるが、現在空間を時間的に見る時には、全体的統一的な見方に立脚しているということが出来る。即ち、現在は過去の時間的必然性において決定づけられており、過去なくしては現在はない。かくの如き空間の時間的な見方は、過去と現在とを因果関係において捉えようとする態度である。現在は過去の時間的事実の必然的結果であり、過去は現在の必然の原因である。かく言語の現象を見据え、そこに客観的法則を発見して因果関係を法則化しようとする時、言語現象を単に現在空間における因果関係のみで決定すると考えるべきではない。単に話手と相手とによって、言語の場が構成され成立するとする考えは、やはり局所的という外はない。そこに、私は言語現象を縦の時間的な因果関係において理解把握する必要がある

と説く理由がある。それで私は言語が成立する場を、空間的な局所場ではなくて、現在の主体と過去の社会的・歴史的・伝承的・伝統的な事実とによって構成せられる、統一的な場を考えたのである。

さて、言語が成立する背景をなす統一場はどのような内容を持っており、どのように現在の言語の成立の原因となってくるのであろうか。私は先に過去の社会的・歴史的・伝統的な事実としたが、具体的な個々の過去の事実が、一つの歴史・伝統として力を持つてくる。主体は社会・歴史・伝統の内容制約を受けるものであって、過去に何の關係なく絶縁しては存在し得ない。無意識的であらうと意識的であらうと、消極的であらうと積極的であらうとにかかわりなく、我々は過去の社会・歴史・伝統と無関係ではあり得ない。言語行動も同様に社会・歴史・伝統と無関係ではない。かく考えると、言語の表現を理解し、鑑賞しようとする際に、社会・歴史・伝統による統一場の背景を、全く無視しては不可能である。その様な理由から、私は統一場の具体的内容を社会・歴史・伝統とするのである。

五、万葉集の言語次元

この言語次元説を証明する為に、万葉集の四五一六首を分析してみた。

短歌や俳句は短いながらも、他の小説や評論や随筆などと同じように、文法論という言語単位として、「文章」「文」「語」のうちでもっとも大きい単位の「文章」として立派に独立性を有する。言語成立の

言語主体・言語次元の分類表

十								九			八								七		六	五	四	三		二		一	巻数				
31 冬の 相聞	30 冬の 雑歌	29 秋の 相聞	28 秋の 雑歌	27 夏の 相聞	26 夏の 雑歌	25 春の 相聞	24 春の 雑歌	23 挽 歌	22 相 聞	21 雑 歌	20 冬の 相聞	19 冬の 雑歌	18 秋の 相聞	17 秋の 雑歌	16 夏の 相聞	15 夏の 雑歌	14 春の 相聞	13 春の 雑歌	12 挽 歌	11 譬 喩 歌	10 雑 歌	9 雑 歌	8 雑 歌	7 相 聞	6 挽 歌	5 譬 喩 歌	4 雑 歌	3 挽 歌	2 相 聞	1 雑 歌	部 立		
18	21	69	145	17	40	44	74	5	8	54	7	16	7	50	6	31	2	30	14	107	195	45	18	102	36	13	79	21	26	23	独白歌	個	
0	0	4	0	0	2	3	2	0	11	11	2	0	22	4	6	1	12	0	0	0	4	12	32	196	0	9	9	2	30	4	伝達歌	人主	
0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	2	0	0	0	0	1	0	0	0	0	伝承歌	体
0	0	0	0	0	0	0	0	0	7	22	0	1	0	21	1	1	0	0	0	0	1	42	38	6	22	3	12	35	0	30	独白歌	団体	
0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	1	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	5	4	5	2	0	2	0	0	4	伝達歌	主	
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	9	3	0	0	0	0	0	0	0	0	伝承歌	体
0	0	0	0	0	0	0	2	1	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	26	10	6	0	6	0	27	15	0	5	独白歌	社会	
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	5	0	0	0	1	2	0	1	伝達歌	主	
0	0	0	98	0	0	0	0	8	0	12	0	0	0	15	0	0	0	0	0	0	0	31	8	0	3	0	24	0	0	9	伝承歌	体	
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	0	4	独白歌	国家	
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	2	0	4	伝達歌	主	
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	11	0	0	伝承歌	体	
18	21	73	243	17	42	47	78	17	29	102	9	19	30	95	13	33	17	30	14	107	229	161	114	309	69	25	155	94	56	84	計	歌数	
539								148			246								350		161	114	309	249		150	84	合計					

条件としての主体・場所・素材などを具有している。そして、さまざまな言語の内容を表現しており、現実の言語の姿をそのまま表している。

従って、この万葉集の歌を言語次元説の立場から分析することは正当であり、意義を有し、言語次元説を証明する材料として使用することも正しいと言える。古今和歌集その他の歌集についても同じことが言える。

次に万葉集の言語次元を分析し、表としたものを掲げる。

表として結果のみを見れば簡単そうに見えるが、その判定に苦しむ歌も多く、何種類かの註釈書を比較検討しながら判定を下していった。

上に掲げる分類表では言語次元の他に、言語主体をも合わせたものとした。数値の正確性を期す為に各巻別、部立別に表示した。

言語主体について一言すれば、時枝誠記氏のあげる言語成立の三条件の主体・場面・素材のうち、主体について、私の場合は個人的主体から集団的主体へと拡大解釈したものであり、個人・団体・社会・国家の四主体を認めるものである。（これについては別に発表する予定である。）

		二十	十九	十八	十七	十六	十五	十四						十三					十二				十一					
合 計	計	58	57	56	55	54 有由縁雑歌	53	52 挽 歌	51 防人 歌	50 譬喩 歌	49 相 聞	48 雑 歌	47 東 歌	46 挽 歌	45 譬 喩 歌	44 問 答	43 相 聞	42 雑 歌	41 悲 別 歌	40 羈旅 発思	39 問 答	38 寄物 陳思	37 正述 心緒	36 譬 喩	35 問 答	34 寄物 陳思	33 正述 心緒	32 旋頭 歌
2875 64%	50% ① 2280	28	60	17	49	0	7	0	0	0	0	0	/	7	0	0	0	2	31	53	0	150	110	13	0	282	148	0
	13% ② 584	3	23	19	39	0	56	0	0	0	0	0	/	0	0	0	0	0	0	0	36	0	0	0	29	0	1	0
	③ 11	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	/	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
764 17% 833 18%	15% ④ 656	164	37	43	32	0	128	0	3	0	0	0	/	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	2% ⑤ 75	12	6	9	4	0	13	0	2	0	0	0	/	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	1% ⑥ 33	3	3	7	2	0	3	0	0	0	0	0	/	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	6% ⑦ 269	0	3	0	3	79	0	1	0	14	0	22	/	9	1	0	0	19	0	0	0	0	0	0	0	0	0	17
	7% ⑧ 314	0	10	0	5	25	0	0	0	0	188	0	/	0	0	18	57	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	6% ⑨ 250	11	7	9	8	0	1	0	0	0	0	0	/	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	⑩ 13	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	/	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
44 1%	⑪ 17	1	4	2	0	0	0	0	0	0	0	0	/	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	⑫ 14	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	/	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
4516 100%	4516 100%	224	154	107	142	104	208	1	5	14	188	22		24	1	18	57	27	31	53	36	150	110	13	29	282	149	17
4516	4516	224	154	107	142	104	208	230						127				380				490						

表の後方の「計」のところの、(1)(4)(7)(10)を合計した独白歌は三二一八首で七一%、(2)(5)(8)(11)を合計した伝達歌は九九〇首で二二%、(3)(6)(9)(12)を合計した伝承歌は三〇八首で七%である。

一般に詩歌や随筆や日記は独白性が濃いから、万葉集などの歌作品では独白の数値が高いのは当然である。しかしすべてが独白であるわけではない。故に、言語を定義して「伝達である」とするのは正しくない事が判る。

次に、万葉集の三大部立の一つである「相聞」に分類されている贈答歌は、当時あるいはそれ以前の奈良時代という社会空間において伝達されたものであるから、伝達歌に分類され、その数値は二二%である。この数値は現実社会における人間関係社会のコミュニケーションから見れば非常に低く思われるかも知れないが、歌集という性格から当然である。

次に、神話や伝説や伝承を詠んだ歌や、未来永久の繁栄を祈念する、時間的な構造を有する歌を伝承歌として分類した。その数値は七%である。全体から見れば僅かかも知れないが、厳然として奈良時代に伝承という言語活動があったことを物

語っている。その行為として古事記や日本書紀が編纂されたのである。その言語活動と言語現象が万葉集の歌のなかに詠みこまれているのである。

このように、わが国最古の歌集のなかに、当時の言語活動として、
 独白・伝達・伝承があったことが反映されている。

このことから、私の伝達万能主義の批判、伝達を唯一原理として言語定義することの批判、そして私の提唱する言語を多次元的に捉える言語次元説が正しいことが証明されると言っていると思う。

六、万葉集の「言」の分析

本項では万葉集のなから「言」の語を探索し、それが言語次元とどのように関係があるか、どのような言語活動を表すものであるかを検討したい。

1、独白言語

万葉集のなかで、独白に関係あるものとして「言いたはしむ」（2例）がある。

玉梓の ……道に出で立ち ……名だにも告らず 言「語」を
 いたはしみかも とる波の 恐き海を 直渡りけむ（十三・三三三九 調使首）

この歌は調使首が備後国神島で行き倒れの屍を見て詠んだ歌で、死者に同情するこの地域社会の鎮魂を祈る独白的な歌である。沖の藻を枕

に眠る死者に対して、一体誰の言った言葉を心にとめ、繰り返しながら、うねり寄せる恐ろしい海を一途に渡ったのであろうかと同情をよせている。誰かの言葉を心中に繰り返しながら、その言葉を持つということは、心中に独言して、忘れないようにする独白の言語の作用である。

次の例は

古に ありけるわざの ……あたらしき 身の壮すら 大夫の
 言「語」いたはしみ 父母に 申し別れて 家離り 海辺に出
 で立ち……（十九・四二二）

これは神戸に伝わる葦屋処女を巡る妻争いの伝説を大伴家持が詠んだもので、伝承歌である。彼女はライバル同士である二人の男の言った愛の言葉を胸中に反復し、独言しながら、そのどちらにも応えられない苦しさに、みずから死を選んだのである。

この二例は、私たちに人や相手の言葉を心中に反復したり独言したりする作用があることを物語っている。明らかに言語の独白作用を意味しており、私の言う独白言語の世界のものである。

2、伝達言語

万葉集のなかで、伝達に関係ある「言」の付く語を次にあげる。

まず、表現行為を現すものとして、「言葉・言葉・言通ふ・言絶ゆ・言告ぐ・言言ふ・言問ふ・言尽す・言尽く・言なし・言出・言に出づ・言成す・言先立つ・言咎む・言成る・言申す・言止む・言挙げ・

言立て・還言・空言・自言・小童言・言繁し・言成す・言さだ多し・言疾し・言寄す・言痛し・言咎め・逆言・伝言・中言・狂言・人言・横言・八十言の葉・太祝詞・言寄せ妻・御言・神言・言ひ伝て遣る」がある。

つぎに、理解行為を現すものとして、「言を聞く・言待つ・言許す」の三語がある。

3、伝承言語

伝承言語に関するものは、「言の職（つかさ）」の一語である。これは、語り部の職業を言うので、言語そのものではないが、この語り部が職業として伝承言語に従事していることがわかるので、重要な語彙である。

伝承言語は語り部以外にも、一般の歌人が神話や伝説や伝承や昔語りを歌に受け継ぎ、詠み継ぐという行為がある。

以上、「言」という語を手がかりとして、言語次元を考察し、言語次元説の成立の可能性について論じた。

七、万葉集の言語生活の語彙

万葉人の言語生活を研究したものととして、池上楨造氏の業績と橋本四郎氏の業績とがある。

池上氏は、口頭言語の生活をあらわす語として、「イフ・ツグ・カ

タル・ノル・トフ・マヲス・マウス・キク・キコユ」をあげ、文字言語をあらわす語としては、「シルス・ヨム」をあげて、主に言語の伝達や表現の問題を論じている。

橋本氏は、「イフ・トフ・ツグ・ノル（イノル）・カタル（カタラフ）・マウス（マヲス）」をあげ、後世の古今・後撰・竹取・伊勢・源氏・枕・土佐・紫式部・更級・方丈・徒然のなかの語彙と比較し表示している。また、カク・ヨム・シルスをあげ、前記作品と比較した表を示している。

二氏の着眼は、主として話し聞く口頭言語と、読み書く文字言語の活動を中心とし、言語の有する伝達の機能面よりの考察である。

私は言語次元説の立場から、万葉集のなから、これを実証する言語生活を表す語を探り、論ずることとする。

1、独白言語

独白言語は口先での吹き、口頭での唱い、口中での祈り、伝達ではない独自の呼びかけなどの、言語活動において成立する。また、詩歌を詠むことも多くは伝達を目的とせず、独自の行なわれ、自己の気持ちを慰める自問自答の性質を有する。幼児や老人の独り言の吹きばかりではなく、成人の吹きもあり、それが口頭の場合だけではなく、書記される詩歌の場合もある。

これに関係あるものとして、「ウタフ（歌ふ）・ヨム（数む）・ノム（祈む）・コヒノム（乞ひ祈む）・ウケフ（祈誓ふ）・イノル（祈

る)」等の語彙がある。これらの語彙のあらわしている言語による独自の機能とその事実とは厳として存することが解る。そして、この独白言語は人間の生活の中で自己表出、自己慰安、精神沈静、神仏祈願などの精神作用に深い関連を持つ。また、伝達言語や伝承言語とは異なる、重要かつ独自の分野を担っていることも判明してくる。

2、伝達言語

次に、伝達言語は社会空間に存する相手に、思想・感情・意志を伝達するところに成立する。共同社会での相互理解と協調、男女の恋と結婚など、重要な言語の役割を有する。この伝達は話し聞く音声伝達の活動と、書き読む文字伝達の活動とに分けることができる。

音声伝達では、「イフ（言ふ）・ノル（告る）・ツグ（告ぐ）・カタル（語る）・めす（召す）・マウス・マラス（申す）・コフ（乞ふ）・ヤル（遣る）・ヨブ（呼ぶ）・ヨバフ（呼ばふ）・トフ（問ふ）・タヅヌ（尋ぬ）・シラス（知らす）・ウク（受く）・ウラトフ（占問ふ）・ユフケトフ（タ占問う）・ユフウラトフ（タト問う）・ヨコス（讒す）・ツツ（伝つ）・ツテコト（伝言）・ツタヘ（伝）・ツマドフ（妻問ふ）・ツマドヒ（妻問）・キク（聞く）・キコス（聞す）・キコユ（聞こゆ）・コタフ（答ふ）・コタヘ（答へ）」などの語彙がある。

文字伝達のほうでは、「カク（書く）・シルス（記す）」などがある。このように伝達言語を表す語彙は多く、その諸事実を知ることがで

き、万葉人の豊かな言語生活を伺い知ることが出来る。このように、恋愛・宮廷・宴会・別れ・贈答の場面において、伝達言語が成立している。そこに喜びや哀しみの感情がうまれ、万葉集の精神生活が浮かんでくる。

3、伝承言語

伝承言語は過去から現在へ、現在から未来へという歴史時間を継承するところに成立する。神話や伝説の伝える過去を現在に継承し、さらにこれを未来の子孫に伝承しようとする。私達は過去に照らして現在を見、未来を意識して現在をあらんとする。このように、歴史や文明は継承され、文学作品をなしたり、詩歌をなす。

万葉集を調査して見ると、音声による伝承と、文字による伝承とを考えることが出来る。音声による伝承には、「イヒツグ（言ひ継ぐ）・カタリツグ（語り継ぐ）・キキツグ（聞き継ぐ）」がある。文字による伝承では「シルシツグ（記し継ぐ）」がある。これらの語彙は「ツグ」とあり、明らかに伝達の「イフ・カタル・キク・シルス」などと異なり、伝承の意識があることが判る。「ツグ」という語は継承するという意味で、単に伝達をいうのではない。

このように、この伝承と伝達は主体の意識も、言語内容も、次元も異なる。従って、この語彙例からも判る通り、言語を伝達と伝承とに区別するのには必然的な理由がある。

そして、伝達言語と伝承言語との相違を、言語の次元の相違から説

明する言語次元説の考え方の正当性も自から明らかとなる。

八、結び

言語の本質観について、私は言語を多次元的にとらえる言語次元説を提唱した。

その前半では、言語の次元を、言語の成立場所から論じ、自己場に成立する独白言語、局所場に成立する伝達言語、統一場に成立する伝承言語を認定した。

後半には、言語次元説を証明する為に、万葉集の中から、実際の言語生活を表す語を取り上げて論じた。

註

- (1) SIハヤカワ著『思考と行動における言語』昭和二十六年・岩波書店
- (2) 佐藤喜代治編『国語学研究事典』昭和五二年・明治書院
- (3) 山田孝雄著『日本文法論』明治四一年・宝文館
〃 『日本文法学概論』昭和十一年・宝文館
- (4) 橋本進吉著『国語学研究法』昭和十年『国語概論』所収・岩波書店
〃 『国文法体系論』昭和三四年・岩波書店
- (5) 時枝誠記著『国語学原論統編』昭和三十年・岩波書店
- (6) 築島 裕著『国語学』昭和三十九年・東大出版会
- (7) 森下喜一著『国語学通論』昭和五十九年・教育出版センター
- (8) 三木幸信・中西宇一著『国語学』昭和五一年・風間書房
- (9) 湯川秀樹著『存在の理法』昭和十八年・岩波書店
- 〃 『極微の世界』昭和十七年・岩波書店
- (10) 『日本大百科全書』小学館
- (11) 池上嘉彦著『意味論』昭和五十年・大修館
- (12) 福田眞久他著『日本語学』平成七年・酒井書店
- (13) 小林英夫著『言語学方法論考』昭和十年・
〃 『言語学通論』昭和二十二年・三省堂
〃 『文体論の建設』昭和十七年・育英書院
〃 『文体論の理論と実践』昭和二十三年・八雲書店
- (14) 波多野完治著『文章心理学の問題』昭和十六年・三省堂
〃 『文章心理学』昭和二十四年・
〃 『現代文章心理学』昭和二十五年・新潮社
〃 『創作心理学』昭和四一年・大日本図書
〃 『文章心理学の理論』昭和四一年・大日本図書
- (15) 佐久間 鼎著『現代日本語法の研究』昭和十一年・厚生閣
〃 『日本語の言語理論的研究』昭和十八年・厚生閣
〃 『現代日本語法の研究』昭和二十七年・厚生閣
〃 『日本語の言語理論』昭和三四年・厚生閣
〃 『日本の表現の言語科学』昭和四二年・厚生閣
- (16) 池上禎造著『万葉人の言語生活』〔万葉集大成 第六卷〕所収 昭和三十年
- (17) 橋本四郎著『古代の言語生活』〔講座国語史 第六卷〕所収 昭和四十七年
(本学教授・国語学)